

中級編

子供たちに
声に出して読んで、
覚えてほしい・書いてほしい
作品集

広島県教育委員会



《中級編 目次》

まり・・・・・・・・・・・・・・・・	八木重吉	1	浦島太郎・・・・・・・・・・	24
素朴な琴・・・・・・・・・・	八木重吉	2	枕草子・・・・・・・・・・	25
はたはたのうた・・・・・・・・	室生犀星	3	源氏物語・・・・・・・・・・	26
道程・・・・・・・・・・	高村光太郎	4	伊曾保物語・・・・・・・・・・	27
千曲川旅情の歌・・・・・・・・	島崎藤村	5	徒然草・・・・・・・・・・	28
旅上・・・・・・・・・・	萩原朔太郎	6	天草洋に泊す・・・・・・・・	29
雨ニモマケズ・・・・・・・・	宮沢賢治	7	日本外史・・・・・・・・・・	30
セロ弾きのゴーシュ・・	宮沢賢治	8	所見・・・・・・・・・・	31
どんぐりと山猫・・・・・・・・	宮沢賢治	9	絶句・・・・・・・・・・	32
銀河鉄道の夜・・・・・・・・	宮沢賢治	10	論語・・・・・・・・・・	33
雪わたり・・・・・・・・・・	宮沢賢治	11	百人一首・・・・・・・・・・	34
風の又三郎・・・・・・・・	宮沢賢治	12		
おじいさんのランプ・・	新美南吉	13		
放浪記・・・・・・・・・・	林芙美子	14		
風琴と魚の町・・・・・・・・	林芙美子	15		
坊っちゃん・・・・・・・・	夏目漱石	16		
仙人・・・・・・・・・・	芥川龍之介	17		
杜子春・・・・・・・・・・	芥川龍之介	18		
吾輩は猫である・・・・・・・・	夏目漱石	19		
山椒大夫・・・・・・・・・・	森鷗外	20		
蜘蛛の糸・・・・・・・・・・	芥川龍之介	21		
狂言 しびり・・・・・・・・		22		
短歌・・・・・・・・・・		23		

まり

八木重吉
やぎじゅうきち

ぽくぽく ひとりについてみた
わたしの まりを

ひよいと

あなたになげたくなるように

ひよいと

あなたがかへして^えくれるように

そんなふうに なんでもいったらなあ

ぽくぽく

ぽくぽく

まりを ついてると

にがい にがい いままでのことが

ぽくぽく

ぽくぽく

むすびめが ほぐされて

花がさいたようにみえてくる

素朴な琴 そぼく こと

八木重吉 やぎじゆうきち

このあかるさのなかへ

ひとつの素朴な琴 そぼく ことをおけば

秋の美しさに耐 た えへかねて

琴 ことはしづか ずかに鳴りい らだすだらう

はたはたのうた

むろうさいせい
室生犀星

はたはたといふさかな、

うすべにいるのはたはた、

はたはたがとれる日は

はたはた雲といふ雲があらはれる。

はたはたやいてたべるのは

北国のこどものごちそうなり。

はたはたみれば

母をおもふも

冬のならひなり。

道程どうてい

高村光太郎たかむらこうたろう

僕のぼく前に道はない

僕のぼく後ろに道は出来る

ああ、自然しぜんよ

父よ

僕をぼく一人立ちにさせた広こうだい大な父よ

僕から目を離はなさないで守る事をせよ

常に父の気魄きぱくを僕ぼくに充みたせよ

この遠い道程どうていのため

この遠い道程どうていのため

千曲川旅情の旅

島崎藤村

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

緑なすはこべは萌えず

若草も藉くによしなし

しろがねの衾の岡辺

日に溶けて淡雪流る

あたたかき光はあれど

野に満つる香も知らず

浅くのみ春は霞みて

麦の色はつかに青し

旅人の群はいくつか

畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む

旅上 りよじょう

萩原朔太郎 はぎわらさくたろう

ふらんすへ行きゆたしと思えども

ふらんすはあまりに遠とおし

せめては新せびろしき背広をきて

きままなる旅たびにいでてみる。

汽車が山道やまみちをゆくとき

みずいろの窓まどによりかかりて

われひとりうれしきことをおもわん

五月ごがつの朝のしのめ

うら若草わかぐさのもえいづる心まかせに。

雨ニモマケズ

みやざわけんじ
宮沢賢治

雨ニモマケズ

南ニ死ニサウナ人アレバ

風ニモマケズ

行ッテコワガラナクテモイイトイ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

北ニケンカヤソシヨウガアレバ

丈夫ナカラダヲモチ

ツマラナイカラヤメロトイ

欲ハナク

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

決シテイカラズ

サムサノナツハオロオロアルキ

イツモシズカニワラツテイル

ミンナニデクノボウトヨバレ

一日ニ玄米四合ト

ホメラレモセズ

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

クニモサレズ

アラユルコトヲ

ソウイウモノニ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ワタシハナリタイ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニイテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

ゼロ弾ひきのゴーシュ

みやざわけんじ
宮沢賢治

(略)

ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるときっきの黒い包つつみをあけました。それは何でもない。あの夕方のごつごつしたゼロでした。

ゴーシュはそれを床ゆかの上にそっと置くと、いきなり柵たなからコップをとってバケツの水をごくごくのみました。

それから頭を一つふって椅子いすへかけるとまるで虎とらみたいな勢いきおいでひるの譜ふを弾ひきはじめました。譜ふをめくりながら弾ひいては考え考えでは弾ひき一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾ひきつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾ひいているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼めもまるで血走ってとても物もの凄い顔すこつきになりいまにも倒たおれるかと思うように見えました。

そのとき誰たれかうしろの扉とをとんと叩たたくものがありました。

「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたように叫さけびました。ところがすうと扉とを押おしてはいつて来たのはいままで五、六ぺん見たことのある大きな三毛猫みけねこでした。

どんぐりと山猫

宮沢賢治

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうとんだりはねたりしました。

ね床にもぐつてからも、山猫のにやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたつたいまできたばかりのようにうるうるもりあがつて、まつ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行きました。

すきとおった風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちょっとしずかになって、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

銀河鉄道の夜

(略)

宮沢賢治

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました。いま新らしく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声が出たと思うといきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の螢鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたという工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくないために、わざと穫れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジヨバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

雪わたり

宮沢賢治

雪がすっかりこおって大理石よりもかたくなり、空も冷たいなめらかな青い石の板でできているらしいのです。

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」

お日様が、まっ白に燃えてゆりのにおいをまき散らし、また雪をぎらぎら照らしました。木なんか、みんなザラメをかけたようにしもでぴかぴかしています。

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」

四郎とかん子とは、小さな雪ぐつをはいてキックキックキック、野原に出ました。

こんなおもしろい日が、またとあるでしょうか。いつもは歩けないきびの畑の中でも、すきでいっぱいだった野原の上でも、好きな方へどこまででも行けるのです。平らなことは、まるで一枚の板です。そしてそれが、たくさんの小さな小さな鏡のようにキラキラキラキラ光るのです。

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」

二人は、森の近くまで来ました。大きなかしわの木は、枝もうずまるくらい立派なすき通ったつららを下げて、重そうに体を曲げておりました。

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。きつねの子あ、よめいほしい、ほしい。」

と、二人は森へ向いて高くさげびました。

しばらくしいんとききましたので、二人はも一度さげぼうとして息をのみこんだ時、森の中から、

「しみ雪しんしん、かた雪かんかん。」

と言いながら、キシリキシリ雪をふんで、白いきつねの子が出てきました。

かぜ またさぶらう
風の又三郎

みやざわけんじ
宮沢賢治

九月一日

どつどつ どどうど どどうど どどう、

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんもふきとばせ

どつどつ どどうど どどうど どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのくらいでしたがすぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場の隅にはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあつたのです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪ばかまをはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいつて来て、まだほかに誰も来ていないのを見て、

「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」

とかわるがわる叫びながら大よろこびで門をはいつて来たのですが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてふるふるふるえしました。がひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり一番前の机にちゃんと座っていたのです。

おじいさんのランプ

(略)

新美南吉

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、それを池のふちの木の枝につるした。小さいのも大きいのも、とりまぜて、木にいつぱいつるした。一本の木でつるしきれないと、そのとなりの木につるした。こうしてとうとうみんなのランプを三本の木につるした。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、燃え、あたりは昼のように明るくなった。あかりをしたって寄って来た魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

と巳之助は一人でいった。しかし立ち去りかねて、ながいあいだ両手をたれたままランプの鈴なりになった木を見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんで来たランプ。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

それから巳之助は池のこちら側の往還に来た。まだランプは、向こう側の岸の上にみなともっていた。五十いくつがみなともっていた。そして水の上にも五十いくつの、さかさまのランプがともっていた。立ちどまって巳之助は、そこでもながく見つめていた。

ほうろうき
放浪記

はやしふみこ
林芙美子

海が見えた。

海が見える。

五年ぶ振りに見る、尾道おのみちの海はなつかしい。

汽車が尾道おのみちの海へさしかかると、

煤すすけた小さい町の屋根が

提灯ちようちんのように広がって来る。

赤い千光寺せんこうじの塔とうが見える、

山は爽さわやかな若葉わかばだ。

緑色の海向うみむこうにドツクの赤い船が、

帆柱ほばしらを空に突つきささしている。

私わたしは涙なみだがあふれていた。

風琴と魚の町

林芙美子

父は風琴を鳴らすことが上手であつた。

音楽に対する私の記憶は、この父の風琴から始まる。

私達は長い間、汽車にゆられてたいくつしていた、母は、私がバナナを食んでいるかたわらで経文を誦しながら、涙していた。「あなたに身をたくしたばかりに、私はこのように苦勞しなければならぬ」と、あるいはそう話しかけていたのかも知れない。父は、白い風呂敷包みの中の風琴を、時々尻で押しながら、粉ばかりになつた刻み煙草を吸っていた。

私達は、このような一家を挙げての遠い旅は一再ならずあつた。

父はまぶたをとじて母へ何か優しく気に語っていた。「今に見いよ」とでもいつているのである。

えんえんとした汀を汽車ははっている。動かない海と、屹立した雲の景色は十四歳の私の眼に壁のように照り輝いて写つた。その春の海を囲んで、たくさん、日の丸の旗をかかげた町があつた。まぶたをとじていた父は、朱い日の丸の旗を見ると、せわしく立ちあがって汽車の窓から首を出した。

「この町は、祭でもあるらしい、降りてみんなかやのう。」

坊ぼつちやん

なつめ そうせき
夏目漱石

親おや譲ゆずりの無鉄砲むてっぽうで小供こどもの時ときから損そんばかり

して居いる。小お学校じぶんに居いる時とき分ぶん学校がっこうの二階にから
飛とび降おりて一週ひとしゅう間かん程ほど腰こしを抜ぬかした事ことがある。

なぜそんな無闇むやみをしたと聞きく人ひとがあるかも

知しれぬ。別段べつだん深ふかい理り由ゆうでもなない。新築しんちくの二階に

から首くびを出いして居いたら、同級生どうきゅうせいの一人ひとりが冗談じょうだん

に、いいくら威張いばつても、そこそこから飛とび降おりる

事ことは出来できまい。弱虫じやくちゅうやーい。と噓はやしたからで

ある。小使こづかいに負おぶささつて帰かえつて来きた時とき、お

やじが大きな眼めをして二階位にがいから飛とび降おり

て腰こしを抜ぬかす奴やつがあるかかと云いったから、此この次つぎ

は抜ぬかさずに飛とんで見みせますと答こたえた。

仙人せんじん

あくたがわりゆうのすけ
芥川龍之介

みなさん。

わたしは今大阪おおさかにいます、ですから大阪おおさかの話わたりをしましょう。

昔むかし、大阪おおさかの町まちへ奉公ほうこうに来た男おとこがありました。名なはなんといいたかわかりません。ただ飯めし炊き奉公ほうこうに来た男おとこですから、権助ごんすけとだけ伝わつたっています。

権助ごんすけは、口入れ屋くちいやののれんをくぐると、キセルをくわえていた番頭ばんとうに、こう、口の世話たのを頼たのみました。

「番頭ばんとうさん。わたしは仙人せんじんになりたいのだから、そういう所ところへ住み込こませてください。」
番頭ばんとうは、あつけにとられたように、しばらくは口もきかずにいました。

「番頭ばんとうさん。聞こえませんか。わたしは仙人せんじんになりたいのだから、そういう所ところへ住み込こませてください。」

「まことにお気きの毒様どくさまですが、……。」
番頭ばんとうは、やっといつものとおり、話を始めました。

「手前の店てまへのみせでは、まだ一度も、仙人せんじんなぞの口入れくちいは引き受けたことはありませんから、どうかほかへおいでなすってください。」

すると権助ごんすけは、不服ふふくそうに、千草ちぐさのももひきのひざを進めながら、こんな理屈りくつをい
だしました。

「それはちと話ちがが違ちがうでしょう。おまえさんの店ののれんには、なんと書いてあるとお
思いなさる。よろず口入れ所くちいと書いてあるじゃありませんか。よろずというからは、
何事なにごとでも口入れくちいをするのが本当ほんとうです。それとも、おまえさんの店では、のれんの上うへに
うそを書いておいたつもりなのですか。」

なるほど、こう言いわれてみると、権助ごんすけが怒おこるのももつともです。

杜子春

芥川龍之介

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春とあって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽して、その日の暮にも困る位、憐な身分になっています。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、繁昌を極めた都ですから、往来にはまだしつきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当っている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾った色系の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで画のような美しさです

わがはい
吾輩は猫である

なつめ そうせき
夏目漱石

わがはい
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。

さんしょうだゆう

山椒大夫

もりおうがい
森鷗外

越後えちごの春日かすがを経て今津いまづへ出る道を、珍めずらしい旅

人の一群ひとむれが歩いている。母は三十歳さいをこえたばかりの女で、二人の子供こどもを連れてついる。姉は十四、弟は十二である。それに四十くらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞はらから二人を、「もうじきにお宿にお着きなさいます。」と言はげまして歩かせようとする。二人の中で、姉娘あねむすめは足を引きずるようにして歩いているが、それでも気が勝つかっていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折折おりおり思い出したように弾力だんりよくのある歩きつきをして見せる。近い道を物詣ものまいりにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群ひとむれであるが、笠かさやら杖つえやら、かいがいしい出立いでたちをしているのが、誰だれの目にも珍めずらしく、また気の毒どくに感ぜられるのである。

蜘蛛の糸

あくたがわりゆうのすけ
芥川龍之介

あるひ
在日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池の
ふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしや
いました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉
のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊から
は、何ともいえない好い匂が、絶間なくあたりへ
あふれております。極楽は丁度朝なのでございま
しょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御たたずみに
なつて、水の面をおおっている蓮の葉の間から、
ふと下のようなすを御覧になりました。この極楽の
蓮池の下は、丁度地獄の底に当つておりますから、
水晶のような水を透きとおして、三途の河や針の山
の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はつきり
と見えるのでございます。

狂言きやうげん

しびり

太郎冠者たろうかじや

(独白) これはめいわくなことを言いつけられた。あそこへは太郎冠者、ここへは太郎冠者と、このように遣つかわれては、身もほねも続くことではない。よし今一度は参まゐろうが、このようなことは重ねての例れいになりたがる。何とぞして、参まゐりともないものじゃが。(思おもいついて) いや、いたしようがある。作病はくびやうを起こして、参まゐるまいとぞんずる。

(大きな声で) あいたあいた、あいたあいた、あいたあいた。

主あるじ

(独白) これはいかなこと。太郎冠者の声じゃ。

太郎冠者たろうかじや

(太郎冠者に向かつて) えい、太郎冠者。なんとした。しびりがきれました。

主あるじ

しびりほどのことをぎょうさんに言うものじゃ。どれどれなおしてやろう。

(ちりを拾って、太郎冠者の額ひたいへつけながら) それそれ。それでよかろう。

太郎冠者たろうかじや

これはなんでござる。

主あるじ

しびりのまじないに、額ひたいにちりをつければなおると言うによつてつけた。おおかた、それでよかろうぞ。

太郎冠者たろうかじや

いかないかな。わたくしのしびりは、親のゆずりのしびりでござるによつて、わらの一駄いちだや二駄にだ、つけた分ではなおりませぬ。

短歌

瓶かめにさす藤ふじの花ぶさみじかければ
たたみの上にとどかざりけり

まさおかしき
正岡子規

この里こゝらに手まりつきつつ子供こどもらと
遊ぶはる春日は暮れずともよし

りようかん
良寛

かすみ立つ長き春はる日を子供こどもらと
手まりつきつつこの日ひくらしつ

りようかん
良寛

金色こんじきの小さき鳥の形して
いちよう散ちるなり夕日のおかに

よさのあきこ
与謝野晶子

たわむれに母をせおいてそのあまり
軽かろきに泣きて三歩あゆ歩まず

いしかわたくぼく
石川啄木

浦島太郎

昔、丹後国たんごのくにに 浦島うらしまという者 はべりしに、その子に 浦島太郎うらしまたろうと申して、年のよわい 二十四、五のおのこ ありけり。

明け暮れく、海のうろくずを取りて、父母ちちははを養やしないけるが、ある日の つれづれに、つりをせんとしていでにけり。

うらうら、島々、入りえ入りえ、至いたらぬ所もなく、つりをし、貝を拾い、みるめをかりなど しける ところに、「えしまが磯いそ」という所にて、かめを一つ つり上げける。

浦島太郎うらしまたろう、この かめに 言うよう、

「なんじ、生しやうあるものの中にも、つるは千年、かめは万年とて、命久ひさしきものなり。たちまち、ここに 命をたたんこと、いたわしければ、助くるなり。常つねには、この恩おんを思いだすべし。」
とて、このかめを もとの海に 返しける。

まくらのそうし
枕草子

せいしょうなごん
清少納言

うつくしきもの。うりにかきたるちごの顔。
すずめの子の、ねず鳴きするに躍り来る。二
つ三つばかりなるちごの、急ぎてはい来る道
に、いと小さきちりのありけるを、目ざとに
見つけて、いとおかしげなるおよびにとらえ
て、大人ごとに見せたる、いとうつくし。

かしら あま
頭は尼そぎなるちごの、目に髪の毛の覆える

を、かきはやらで、うちかたぶきて物など見
たるも、うつくし。

げんじものがたり
源氏物語

むらさきしきぶ
紫式部

いづれの御時おおんときにか、女御にようご、更衣こういあまたさ

ぶらいたまいける中に、いとやんごとなきき
わにはあらぬが、すぐれて時めきたまうあり
けり。

伊曾保物語いそほものがたり

はととありのこと

ある川のほとりに、あり、遊ぶことありけり。

にわかには水かさ増まさりきて、かのありをさそい流る。うきぬしずみぬするところに、はと、こずえよりこれを見て、「あわれなるありさまかな。」と、こずえをちと食い切つて、川の中に落としかければ、あり、これに乗つてなぎさに上がりぬ。かかりけるところに、ある人さおの先にとりもちをつけてかのはとをささんとす。あり、心に思うよう、「ただ今の恩おんを送らんものを。」と思い、かの人の足にしかと食いつきければ、おびえあがつて、さおをかしこに投げすてけり。そのものの色やしる。しかるに、はと、これをさとりて、いずくともなく飛とび去りぬ。

そのごとく、人の恩を受けたらん者は、「いかさまにもそのむくいをせばや。」と思うところざしをもつべし。

つれづれぐさ
徒然草

けんこうほうし
兼好法師

八つやになりし年とし、父ちちに問といていわく、「仏ほとけはいかな
るものにか候そうろうらん。」と言いう。父ちちがいわく、「仏ほとけ
は、人のなりたるなり。」と。

また問とう、「人ひとに何なにとして、仏ほとけにはなり候そうろうやらん。」
と。父ちちまた、「仏ほとけの教しよえによりてなるなり。」と答こたう。

また問とう、「教しよえ候そうろいける仏ほとけをば、何なにが教しよえ候そうろ
いける。」と。また答こたう、「それもまた、さきの仏ほとけ
の教しよえによりて、なりたもうなり。」と。

また問とう、「その教しよえ初はじめ候そうらいける第一はつだいの仏ほとけは、
いかなる仏ほとけにか候そうらいける。」と言いうとき、父ちち、「空そらよ
りや降ふりけん、土つちよりやわきけん。」と言いいて、笑わらう。

「問といつめられて、え答こたえずなりはべりつ。」と、諸しよ
人にんに語かたりて興きようじき。

あまくさなだ
天草洋に泊す

らいさんよう
頼山陽

くも やま
雲か山か
ご えつ
呉か越か

すいてんほうふつ
水天髻髯
せい いっぱつ
青一髪

ぼんりふね はく
万里舟を泊す
あまくさ なだ
天草の洋

けむり ほうそう よこ
煙は篷窓に横たわりて
ひようや ぼつ
日漸く没す

べっけん
瞥見す
たいぎよ なみま は
大魚の波間に跳ぬるを

たいはくふね あた
太白船に当つて
めい つき に
明月に似たり

にほんがいにし
日本外史

らいさんよう
頼山陽

〈原文・読み下し文〉

ぜんりやく　おおえやま　わた　おいのさか　いた
（前略）夜、大江山を度り、老坂に至

うせつ　すなわ　びっちゆう　おもむ
る。右折すれば則ち備中に走くの道

みつひですなわ　ばしゆ　は　し
なり。光秀乃ち馬首を左にして馳す。士

そつおどろ　あや　すで　かつらがわ　わた　みつひで
卒驚き異しむ。既に桂川を渉る。光秀

すなわ　むち　あ　ゆびさ　ようげん　いわ
乃ち鞭を挙げて東を指し、颺言して曰

わ　てき　ほんのうじ　あ
く、「吾が敵は本能寺に在り」と。

所見 しよ けん

菅茶山 かんちやざん

落日残紅在

らくじつざんこうあ
落日残紅在り

新秧嫩翠重

しんおうどんすいかさ
新秧嫩翠重なる

遥雷何処雨

ようらいいず ところ あめ
遥雷何れの処の雨ぞ

雲没両山峰

くも ぼつ りようざんぼう
雲は没する両山峰

絶句ぜつく

杜甫とほ

江碧鳥逾白

こうみどり とりいよいよしろ
江碧にして鳥逾白く

山青花欲然

やまあお はなも ほっ
山青くして花然えんと欲す

今春看又過

こんしゅんみすみすまたす
今春看又過ぐ

何日是帰年

いず ひ こ きねん
何れの日にか是れ帰年ならん

ろんご
論語

こうし
孔子

まな とき これ なら ま よろこ
学びて時に之を習う、亦た説ばしからずや。

とも えんぼう き ま たの
朋の遠方より来たるあり、亦た楽しからずや。

われじゆうゆうご がく こころざい さんじゆう
吾十有五にして学に志す。三十にし

た しじゆう まど ごじゆう てんめい
て立つ。四十にして惑わず。五十にして天命

し ろくじゆう みみしたが しちじゆう
を知る。六十にして耳順う。七十にして

こころ ほつ ところ したが のり こ
心の欲する所に従いて矩を踰えず。

百人一首

1 秋の田の仮庵の庵の苦をあらみ わが衣手は露にぬれつつ

てんじてんのう
天智天皇

2 春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

じとうてんのう
持統天皇

3 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

かきのもとのひとまる
柿本人麻呂

4 田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

やまべのあかひと
山辺赤人

5 奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

さるまるだゆう
猿丸大夫

6 かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける

ちゆうなごんやかもち
中納言家持

7 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

あべのなかまる
安倍仲磨

8 わが庵は都のたつみしかぞすむ 世をうち山と人はいふなり

きせんほうし
喜撰法師

9 花の色は移りにけりないたづらに わが身世にふるながめせし間に

おののこまち
小野小町

10 これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関

せみまる
蝉丸

11 わたの原八十島かけてこぎ出でぬと 人には告げよ海人の釣舟

さんぎたかわら
参議篁

12 天つ風雲のかよひ路吹き閉ぢよ をとめの姿しばしとどめむ

僧正遍昭

13 筑波嶺の峰より落つる男女川 恋ぞつもりて淵となりぬる

陽成院

14 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに 乱れそめにしわれならなくに

河原左大臣

15 君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ

光孝天皇

16 立ち別れいなばの山の峰に生ふる まつとし聞かば今帰り来む

中納言行平

17 ちはやぶる神代も聞かず竜田川 からくれなゐに水くくるとは

在原業平朝臣

18 住の江の岸に寄る波よるさへや 夢の通ひ路人目よくらむ

藤原敏行朝臣

19 難波瀉短き芦のふしの間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや

伊勢

20 わびぬれば今はた同じ難波なる みをつくしても逢はむとぞ思ふ

元良親王

21 今来むと言ひしばかりに長月の 有明の月を待ち出でつるかな

素性法師

22 吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ

文屋康秀

23 月見れば千々にものこそ悲しけれ わが身ひとつの秋にはあらねど

大江千里

24 このたびは幣ぬさもとりあへず手向山たむげやま 紅葉もみぢの錦神にしきのまにまに

菅家かんけ

25 名おにし負おはば逢坂山あふさかやまのさねかづら 人に知られでくるよしもがな

三条右大臣さんじょうのうだいじん

26 小倉山をぐらやま峰みねのみぢ葉心はこあらば 今ひとたびのみゆき待たなむ

貞信公ていしんこう

27 みかの原いつみがはわきて流るる泉川いづみがは いつ見きとてか恋こひしかるらむ

中納言兼輔ちゆうなごんかねすけ

28 山里は冬ぞさびしさまさりける 人目も草もかれぬと思へば

源宗于朝臣みなものむねゆきあそん

29 心あてに折らばや折らむ初霜はつしもの 置きまどはせる白菊しじゆげいの花

凡河内躬恒おおしこうちのみつね

30 有明ありあけのつれなく見えし別れより 暁あかつきばかり憂うきものはなし

壬生忠岑みぶのただみね

31 朝ありあけぼらけ有明ありあけの月と見るまでに 吉野よしのの里に降れる白雪

坂上是則さかのうえのこれのり

32 山川やまがはに風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉もみぢなりけり

春道列樹はるみちのつらぎ

33 ひさかたの光のどけき春の日に 静心しずこころなく花の散るらむ

紀友則きのともり

34 誰たれをかも知る人にせむ高砂たかさごの 松も昔の友ならなくに

藤原興風ふじわらのおきかぜ

35 人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香かにほひける

紀貫之きのつらゆき

36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいづこに月宿るらむ

きよはらのふかやぶ
清原深養父

37 白露に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける

ふんやのあさやす
文屋朝康

38 忘らるる身をば思はず誓ひてし 人の命の惜しくもあるかな

うこん
右近

39 浅茅生の小野の篠原忍ぶれど あまりてなどか人の恋しき

さんぎひとし
参議等

40 忍ぶれど色に出でにけりわが恋は ものや思ふと人の問ふまで

たいらのかねもり
平兼盛

41 恋すてふわが名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか

みぶのただみ
壬生忠見

42 契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山浪こさじとは

きよはらのもとすけ
清原元輔

43 逢ひ見てののちの心にくらぶれば 昔はものを思はざりけり

ごんちゆうなごんあつただ
権中納言敦忠

44 逢ふことの絶えてしなくはなかなか 人をも身をも恨みざらまし

ちゆうなごんあさただ
中納言朝忠

45 あはれとも言ふべき人は思ほえで 身のいたづらになりぬべきかな

けんとくこう
謙徳公

46 由良の門を渡る舟人かぢを絶え 行方も知らぬ恋の道かな

そねのよしただ
曾禰好忠

47 八重葎しげれる宿のさびしきに 人こそ見えね秋は来にけり

えぎようほうし
恵慶法師

48 風をいたみ岩うつ波のおのれのみ くだけてものを思ふころかな

みなもとのしげゆき
源重之

49 みかきもり衛士のたく火の夜は燃え 昼は消えつつものをこそ思へ

おおなかとみのよしのぶ
大中臣能宣

50 君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな

ふじわらのよしとか
藤原義孝

51 かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを

ふじわらのさねかた あそん
藤原実方朝臣

52 明けぬれば暮るるものとは知りながら なほ恨めしき朝ぼらけかな

ふじわらのみちのぶ あそん
藤原道信朝臣

53 嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は いかにかに久しきものとかは知る

うだいしょうみちつなのはは
右大将道綱母

54 忘れじの行く末まではかたければ 今日を限りの命ともがな

ぎどうさんしのはは
儀同三司母

55 滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ

だいなごんきんとう
大納言公任

56 あらざらむこの世のほかの思ひ出に いまひとたびの逢ふこともがな

いずみしきぶ
和泉式部

57 めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな

むらさきしきぶ
紫式部

58 有馬山猪名の笹原風吹けば いでそよ人を忘れやはする

だいにのさんみ
大弐三位

59 やすらはで寝なましものを小夜ふけて かたぶくまでの月を見しかな

あかぞめえもん
赤染衛門

60 大江山おほえやまいく野の道の遠ければ 　　まだふみもみず天の橋立あまはしたて

小式部内侍こしきぶのないし

61 いにしへの奈良の都の八重桜やへざくら 　　けふ九重このへにほひぬるかな

伊勢大輔いせのたいふ

62 夜よをこめて鳥の空音そらねははかるとも 　　よに逢坂あふさかの関せきはゆるさじ

清少納言せいしょうなごん

63 今はただ思ひ絶たえなむとばかりを 　　人づてならでいふよしもがな

左京大夫道雅さきようのだいふみちまさ

64 朝ぼらけ宇治うぢの川霧かはぎりたえだえに 　　あらはれわたる瀬々の網代木あじろぎ

権中納言定頼ごんちゆうなごんさだより

65 恨うらみわびほさぬ袖そでだにあるものを 　　恋こひに朽くちなむ名こそ惜をしけれ

相模さがみ

66 もろともにあはれと思へ山桜 　　花よりほかに知る人もなし

前大僧正行尊さきのだいそうじようぎようそん

67 春の夜の夢ばかりなる手枕たまくらに 　　かひなく立たむ名こそ惜をしけれ

周防内侍すおうのないし

68 心にもあらでうき世にながらへば 　　恋こひしかるべき夜半よはの月つきかな

二三条院さんじよういん

69 嵐吹く三室あらしふ みむろの山のもみぢ葉は 　　竜田たつたの川の錦にしきなりけり

能因法師のういんほうし

70 さびしさに宿を立ち出いでてながむれば 　　いづ（ず）こも同じ秋の夕暮ゆふぐれ

良暹法師りようぜんほうし

71 夕されば門田かどたの稲葉いなばおとづれて 　　芦あしのまろやに秋風あきかぜぞ吹く

大納言経信だいなごんつねのぶ

72 音に聞く高師の浜のあだ浪は かけじや袖のぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

73 高砂の尾の上の桜咲きにけり 外山の霞立たずもあらなむ

権中納言匡房

74 憂かりける人を初瀬の山おろしよ はげしかれとは祈らぬものを

源俊頼朝臣

75 契りおきしさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり

藤原基俊

76 わたの原こぎ出でて見ればひさかたの 雲居にまがふ沖つ白波

法性寺入道前関白太政大臣

77 瀬をはやみ岩にせかるる滝川の われても末に逢はむとぞ思ふ

崇徳院

78 淡路島かよふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝覚めぬ須磨の関守

源兼昌

79 秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ

左京大夫顕輔

80 長からむ心も知らず黒髪の 乱れて今朝はものをこそ思へ

待賢門院堀河

81 ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる

後徳大寺左大臣

82 思ひわびさても命はあるものを 憂きにたへぬは涙なりけり

道因法師

83 世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

84 長らへばまたこのごろやしのばれむ 憂しと見し世ぞ今は恋しき

ふじわらのきよすけあそん
藤原清輔朝臣

85 夜もすがらもの思ふころは明けやらで 閨のひまさへつれなかりけり

しゅんえほうし
俊恵法師

86 嘆けとて月やはものを思はする かこち顔なるわが涙かな

さいぎようほうし
西行法師

87 村雨の露もまだひぬ真木の葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮

じやくれんほうし
寂蓮法師

88 難波江の芦のかりねのひとよゆるみをつくしてや恋ひわたるべき

こうかもんいんのべつとう
皇嘉門院別当

89 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることの弱りもぞする

しよくしないしんのう
式子内親王

90 見せばやな雄島のあまの袖だにも 濡れにぞ濡れし色はかはらず

いんぷもんいんのたいふ
殷富門院大輔

91 きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣片敷きひとりかも寝む

きよつとくせつしやうなきのだいじようだいじん
京極摂政前太政大臣

92 わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし

にじよういんのさぬき
二条院讃岐

93 世の中は常にもがもな渚こぐ あまの小舟の綱手かなしも

かまくらのうだいじん
鎌倉右大臣

94 み吉野の山の秋風小夜ふけて ふるさと寒く衣うつなり

さんぎまさつね
参議雅経

95 おほけなくうき世の民におほふかな わがたつ袖に墨染の袖

さきのだいそうじようじえん
前大僧正慈円

96 花さそふ嵐あらしの庭の雪ならで ぶりゆくものはわが身なりけり

入道前太政大臣

97 来ぬ人をまつほの浦うらの夕なぎに 焼くや藻塩もしほの身もこがれつつ

権中納言定家

98 風そよぐならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける

従二位家隆

99 人もをし人も恨うらめしあぢきなく 世を思ふゆるにも思ふ身は

後鳥羽院

100 ももしきや古き軒端のきばのしのぶにも なほあまりある昔なりけり

順徳院